

## 論 説

# 「王・民之大欲・大恐」：指導者の自意識・強迫観念 と中国人の精神伝説の深層（序論・続）

夏

剛

### 人心・欲望の深淵と「中国的大快樂主義」

佐野眞一は『東電OL殺人事件』の中で、事件と人物の内面の両方の謎に肉迫した。解らぬ事は正直に解らぬと書く事を記録文学の要諦とし、一知半解の講釈を邪道と視る其の志向は、字形の「言・迷」が象徴する謎の複雑さと人心の奥深さに規定された処も有ろう。人間存在の深淵の畔に招かれた感慨に捉われて慄然と立ち尽くすと言う彼の思いから、筆記小説集・『世説新語』が出典の「盲人騎瞎馬、夜半臨深池」(後述)を連想する。

魯迅の『中国小説史略』(1924)でも取り上げられた此の作品は、南朝・宋の臨川王・劉義慶が編纂し後漢～東晋の佚事の「集錦・什錦」(寄せ集め)だ。乱世に生きる中国の知識人の在り方は、作中の時代に端的に現われた。「清流」と自任する後漢の士たちは政治に関する議論を好み、曹操が言論管制を敷いた後は逆に脱政治の哲学談義が流行った。前者の「清議」は儒家の気骨を貫き、後者の「清談」は道家の無欲を装う物である。

中国の古賢の「得意淡然，失意泰然」は勝海舟に感銘を与えたが、其の金言を擬って言えば「得意入世，失意出世」の超脱も有る。順調な時には「入世」(現実に参加する)，挫折の場合は「出世」(現実から離脱する)との使い分けは、清議 清談の移行にも見え隠れする。「清談」期の竹林七賢の言動は、老荘思想の欲望の放擲と放縦，無欲と大欲，真心と狂言の両面を示したが、孔孟の道も上昇志向や道義的な潔癖の一本槍ではない。

『論語・公治長第5』は、次の言で始まる。「子謂公治長：“可妻也。雖在縲紲之中，非其罪也。”以其子妻之。」(孔子は公治長の事を、「娶らせて良い。投獄された事が有ったが、彼の罪ではない」と言い、自分の娘を彼に嫁がせた。)  
「子謂南容：“邦有道，不廢；邦無道，免於刑戮。”以其兄之子妻之。」(孔子は南容の事を、「邦に道の有る時は廢れず用いられ，邦に道の無い時は刑死を免れる」と言い、兄の娘を彼に嫁がせた。)

『論語』の篇名も語録の配置も恣意性が高いと見られがちだが、此の例が示す様に必ずしも

当るまい。渋沢栄一は『論語講義』(1924)の中で、「この篇すべて27章。みな古今人物の賢愚得失を語る」とした<sup>60)</sup>が、可能性の担保価値への洞察が最終の決め手と成る金融業の巨頭らしい概括だ。弟子や歴史人物の名を題とする篇は此を始め、全20篇の半数強を占めるが、深読みをすれば孔子・孔門の人間中心・人脈重視の志向を感じる。

朱熹に従い2節を纏めて講釈する渋沢は、「窮達を問わざ」る孔子の人物本位の着眼に同調した。曰く、「其の人賢なれば窮地に居るも何時か発達の時有るべし。其の人不肖なれば顯職に在るも早晚失望の時来らん。貧富また同じ。」<sup>61)</sup>其の窮達転変の見通しと賢愚・得失の視座には、日本の資本主義の父の『論語』+算盤の両面が出るが、孔子の発想を更に吟味するなら、悪世は良貨を駆逐し良世は悪貨を駆逐するという定理も抽出できる。

毛夫妻が甥・毛遠新の結婚相手の選択に関与した話と通じるが、娘や姪の「終身大事」(婚姻)が係かるだけに、2人の門人に対する孔子の評価は究極の価値判断と言える。公治長の逮捕歴は前出の『<sup>インターナショナル</sup>国際歌』の「全世界的罪人」とも繋がるが、彼の理解は乱世の暗黒を窺わせる。「岳父」(婿に対する義父)の字面が象徴する通り、道義に基づく其の確信は「仁者乐山」の観が有る。一方、南容に就いての成算は「智者楽水」の性質を持つ。

「不廢・免於刑戮」で明らかな様に、公治長が体験した人身自由の剥奪は師にとって、平和時の地位や機会の喪失と共に忌避の対象だ。其の忌避は万人共通の本能であるが、孔子が保証した南容の安全性は、不当逮捕を免れるだろうという可能性だけでなく、逮捕に当らぬ様にする心構えと能力も含む。乱・治に対する師・弟双方の両睨みは、今風で言う「做最壞の打算、争取最好的結果」(最悪を覚悟した上で、最善の結果を目指す)だ。

国交正常化交渉の打診に当る日本の経済人は、周恩来のそんな旨の発言に深い印象を受けた<sup>62)</sup>。周が日本の顕著な短所とした一部の政治家の近視眼的な処<sup>63)</sup>には、左様な理想と現実、想像と行動の「<sup>スパン</sup>跨度」の欠如も有る。泡沫<sup>バブル</sup>経済崩壊後の「壞帳」(不良債権)処理の遅滞に因る国富の蒸発は、期間も規模も世界史上の記録を作った。其の衰退の根源は他でもなく、最悪の事態と向き合う勇・智が無く、希望的な観測に<sup>すが</sup>縫い続ける不作為だ。

甘い待望に拠る長い耐乏は元を糾せば過分な大望の「<sup>わるいけっか</sup>悪果」で、泡沫経済期の全民的な財テクの狂騒は儲けを確信し失敗を想定せぬ戯れだった。経済敗戦で国の借金が猛烈に膨らんだ今も、日本人は2度経験した預金封鎖の悪夢を綺麗に忘れてる。前の論考で此の国の無防備の象徴に、地下鉄サリン事件の直後の警察庁長官狙撃事件と新首相公邸の構造上の弱点を挙げたが、事実は論より奇なりと言うべきか、両者の接点に新たな事象が出た。

危機管理を目玉とする新首相公邸の後方に高層ビルの建設を許した事は、狙撃の隙を指摘した外国の保安専門家を訝らせたが、窓の角度や硝子の細工で善処できた問題なのだ。其の館の<sup>やかた</sup>主に成り損なった小渕首相の急死は、外敵の凶弾ではなく内部の時限爆弾に因る悲劇だ。同じ竹下派の7奉行の一員だった自由党党首・小沢一郎との決裂が引き金で、心身の緊張・疲労が

「王・民之大欲・大恐」：指導者の自意識・強迫観念と中国人の精神伝説の深層（序論・続）（夏）

限界を超えた様だが、外因なる身内と内因なる身の内とは妙に通じる。

1987年、中曽根康弘から後任総裁の指名を貰う為に、自民党の<sup>ニュー・リーダー</sup>新領袖の間に闘いが繰り広げられた。竹下登と安倍晋太郎の直談判の最中、3日も不休不眠が続いた竹下派の事務総長・小淵は栄養補給の注射を受けた処、血圧が異常に上がっている事が判り絶対安静を厳命された。此以上動く<sup>ま</sup>と命も請け合いませんよと医者に釘を刺されたが、文字通りの必死体験が首相時代に教訓と成らず、体力以上に動き捲ったのは無謀で自殺に等しい。

13年前の小淵の命拾いの契機は、安倍派の事務総長・三塚博から、「俺、別室に医者を呼んでいて、注射を打って貰ったから楽に成った。お前も其の医者に注射して貰って来いや」と誘われた事だ<sup>64</sup>。私党集団の死闘の中の其の利敵行為は、辛い国・中国では考え辛い。「文革」時代の極端な例を挙げるなら、江青は周恩来の癌の治療を何度も妨害し、林彪一味は賀龍元帥を死に追い込むべく、持病の糖尿病を悪化させる投薬を故意にした。

周と葉剣英への打撃を図る林彪・江青等は、2人の軍事参謀だった総参謀部作戦部次長・雷英夫を8年も監禁した。雷は酷刑の<sup>せい</sup>所為で重病に罹ったが、当局の手術の提案を拒否した。罪人の儘では手術刀が処刑の凶器に化しかねぬ危険を、敏感に嗅ぎ付いたわけだ<sup>65</sup>。因みに、国民党政権国防相経験者の広西軍閥・白崇禧は台湾に行った後、政敵・蒋介石の指図で過度の「壮陽薬」（強精剤）を仕掛けられ、遂に精力が尽きて逝ったと言う<sup>66</sup>。

歳暮に洗剤や食物を贈る日本人の清潔・美食志向に対して、中国の歳暮の人気定番は「益寿延年」願望を映す「補薬」（滋養強壮剤）類だ。半面、毛沢東時代の外事規律には薬品の贈与を禁じる件が有った。「補薬」の<sup>くだり</sup>謳い文句の「十全大補」に因んで言うと、「万全大防」の用心と思える。江沢民・朱鎔基の評価を得た歴史小説・『乾隆皇帝』には、奸臣が皇帝下賜の薬を小細工し忠臣を毒殺する話が出た<sup>67</sup>が、現代の投影を濃厚に感じる。

台湾時代の白は前にも、偽装交通事故の暗殺に遭ったと言う<sup>68</sup>。蔣の無情を熟知した総統代理経験者の広西軍閥・李宗仁は海外に身を置き安全を保ったが、籠の中の鳥に甘んじる白の選択は自ら「小諸葛（孔明）」の異名を否定した。其の「脱陽死」は他力本願の悲劇と共に、私欲暴走の自業自得だったか。強精剤の濫用は政争の大恐と失意の寂寞を紛らす穴埋めの<sup>つもり</sup>心算だったとされる<sup>69</sup>が、大欲は73歳の彼の精力の出超を招き墓を掘った。

彼の生年は毛と同じで没年は「文革」勃発の年だが、毛は「文革」前に厄年の73歳を頻りに気にした。60代の彼は性力の衰退に強迫観念を抱く余り強精剤の投用を命じた、と元主治医が米国で暴露した<sup>70</sup>。国内の関係者の否認は見当らぬ<sup>71</sup>が、此の手の噂が中国で信じ込まれ易い背景には、君主や高齢の権力者と強精剤とを直結する固定観念が有る。明の光宗帝が即位の直後に急死したのも、媚薬等の「虎狼之薬」を乱用した結果だ<sup>72</sup>。

沢沢栄一は妾宅に居ながら自分は此処に来るはずが無いと言って来客を追い返し、「自分の遣って来た事で俯仰天地に恥じる物は無いが、女関係だけは別だ」と開き直った<sup>73</sup>。傑物の

「禁区」(立ち入り禁止区域)・「特区」(特別区域)を窺わせる言動だが、照れ隠しは世間への後ろ目痛さでもある。孔子の「少戒色・壮戒闘・老戒得」の不十分を示す様に、「破廉恥」の断罪で年配の著名人の政治生命が断られた例は1昔前の中国に有る。

胡耀邦失脚の前年(1986),72歳の作家・周而复が党籍剥奪・公職解任の処分を受けた。改革元年(79)に文化省次官に任命された古参幹部だけに、唐突で衝撃的な転落である。日中政治家友好書道展の中国側代表団を率いて訪日の際に、国家の尊厳と共産党員の道德規律を著しく傷付けた、とするのが公式発表の罪状だ。禁断の靖国神社の見物も槍玉に上がったが、公表さえ憚られた国辱とは性商店ポルノショップに立ち寄った事と見られる<sup>74)</sup>。

中央の要人に催淫薬の購入を頼まれたとも噂されたが、真相が封印された以上には形而上的な推論しか出来ぬ。其の後10年も経たぬ内に日本も顔負けする程、北京の繁華街に性商店が続々と登場した。男女老若が堂々と媚薬・性道具おとなのおもちゃを求める世相と照らせば、昔の禁欲主義の行き過ぎと今の公序良俗の衰退を同時に感じる。共産党と儒教の道德律の束縛の緩みに伴う隔世の観は、民衆の大欲と「中国的大快樂主義」<sup>75)</sup>の覚醒・爆発と言える。

### 「千秋功罪・評説」の重圧と「功德・樹碑」の理・礼・利の重畳

毛の『昆侖』の前半が、思い出される。「横空出世、莽昆侖、閱尽人間春色。飛起玉龍三百万、攪得周天寒徹。夏日消溶，江河横溢，人或為魚鱉。千秋功罪，誰人曾与評説？」(空に横たわりて 世に出ず，莽たり 昆侖，人間の春の色を 閱し尽したり。飛びて起つは 玉龍三百万，周天しゅうてんを攪みだしたれば 寒さ徹す。夏の日に 消溶れば，江河 横溢れ，人 或いは魚鱉と ん 千秋の 誰人が 評説を する竹内実訳<sup>9)</sup>

長征の直後に書いた詞(1935)の此の前半は、精神伝説の中の中華民族の揺り籠なる山を詠む作品だけに、中国の途轍も無い規模スケールと激越を解すには役立つ。崑崙の積雪を形容する「飛起玉龍三百万」は、如何にも中国的な誇張であるが、毛が自註の中で「借用」と明記した「前人」(北宋・張元)<sup>77)</sup>の「戦罷玉龍三百万，敗鱗残甲满天飛」(戦い罷やみて玉龍三百万，敗鱗残甲天に満ちて飛ぶ。竹内実訳<sup>78)</sup>)は、深く吟味する価値が有る。

本歌の2句は初めは「戦死玉龍三十万，敗鱗風卷满天飛」で、後に上記の通りと成った<sup>79)</sup>。曾て孫悟空が此処を通った時に芭蕉扇で火を消し山々が白く成った，という民間の伝説も毛は自註で引いた。中国と中国人を読み解く作業の煩雑は、左様な典故を把握して置く必要にも在る。件の出典は毛の詩歌の読解で素通りされがちだが、初出版本の「戦死三十万」が同じ南宋の後の流布本で「戦罷(退)三百万」に変わった事は、隠れ味を持つ。

中身が異なるものの数が10倍も膨らみ大きい方が定着したのは、中国的な大風呂敷志向を証す結果だ。南京虐殺死者30万人説を巡る日・中間の不毛な対立は、精密統計に拘る日本人

「王・民之大欲・大恐」：指導者の自意識・強迫観念と中国人の精神伝説の深層（序論・続）（夏）

と概数を好む中国人との断層にも起因する。其の毫・豪の「陰差陽錯」はともかく、桁外れた「戦死（罷）三十（百）万」は、李白の「白髪三千丈」の大袈裟や孫悟空の一躍10万8千里の神話と違って、雪紛紛の有様と戦綿々の歴史の両面で真実味が有る。

南京虐殺の死者数が中国側の公称とずれたにしても、或いは毛沢東時代の大飢饉や「文革」の「非正常死亡」者数に及ばぬとしても、大規模な惨殺の事実と本質は変わらぬ。抗日戦争の勝利を「惨勝」とする見方が中国に有るが、「雪・血」の同音を引き合いに出すまでもなく、「戦罷（退）玉龍三百万，敗鱗残甲满天飛」は其の見立てに成る。「玉龍」は「玉皇大帝・真龍天子」を連想させるが、中華民族の始祖 - 炎・黄両帝も敵同士だ。

毛の自註は曰く、「宋人詠雪詩云：“戦罷玉龍三百万，敗鱗残甲满天飛。”昆侖各脈之雪，積世不滅，登高遠望，白龍万千，縱横飛舞，並非敗鱗残甲。夏日部分消溶，危害中国，好看不好吃，試為評之。」<sup>80)</sup>山を覆う雪は敗北の残片でないとした上で白い龍の負面を突く毛は、山の高さも雪の多さも不要で3分の2を切り捨てようと詞の後半で言う<sup>81)</sup>。昆侖を尊崇の対象と攪乱要因と見做すのは、己れと民族の遺伝因子への自己愛と自己批判か。

「横空出世」=「横在空中・超出人世」<sup>82)</sup>と「莽」は、俱に指導者の条件と自意識の「出類拔萃」(前出)と繋がる。此処で形而下と負の意味で用いた「積世不滅」は、王・民の大欲と強迫観念の極め付けだ。「出類拔萃之輩」の究極の恐怖には、「千秋功罪」の「評説」の重圧も有る。神壇に祭られた昆侖山も毛の容赦無い批判を浴びたが、後に詳述する「好看不好吃」(見た目が好いが美味しくない)は、彼の現実主義を濃厚に反映した。

中国人の精神伝説の源を成す神話は、古代ギリシャ等の神話に比べて量も体系性も乏しく、神話や神が現実社会に奉仕させられがちだ、と言われる。其の「有限・散乱・務実」の特徴<sup>83)</sup>は、人間本位・自己中心と農耕民族的 - 商人的な現実主義に帰せる。露伴の『運命』の3番目の句に、「洪水天に滔るも、禹の功これを治め、大旱地を焦がせども、湯の徳これを濟めば(略)」と出たが、治世の実績が崇拜の資格と成るのは極めて功利的だ。

対句の中の鍵言葉が組み合った「功德」は、日本語で「こうとく」とも「くどく」とも読む。『広辞苑』は其々「功と徳。功を挙げ徳を立てること」、「〔仏〕よい果報をもたらすもとなる善行。“を積む”“を施す”善行の結果として与えられる神仏のめぐみ。ごりやく。“がある”」と解した。後者の「は和製の語意であり、中国語の同じ仏教用語は『辞海』の語釈で、「誦經念仏布施」「為敬神敬仏所出的捐款」を指す。

誦経・念仏は道徳修業の積み立てだとしても、神仏を祀る為の寄付金は「銅臭味」(銅貨の臭い)がする。只、「御利益」の字面と発想も現金的な物だ。功業・功績が徳行・徳目の前に出る語順は、「功德」の功利先行の指向性を示唆する。「果報」(因果報応)の字面を借りて言えば、「功德」の「に対する」の授与の性質には、結果に因る相応の果報<sup>リターン</sup>が有る。「功德」と「功德」の同根性は、両者を「別義」とした『広辞苑』にも窺える。

『辞海』の「功德 功業和德行」の例文は、『漢書・礼楽誌』の「有功德者，靡不褒揚」だ。「靡不」(ざる[は]無し)の強調が示す様に，功德は常に褒揚の対象と成る。日本に於ける私徳觀念の肥大と公德觀念の未発達を映すが如く、『広辞苑』の「功德」には派生語は無いが，中国語には「功德碑」が有る。『角川大字源』の解の通り，其の人の功と仁徳を記し讃えた石碑を指し，出典は『南柯太守伝』の「百姓歌謡，建<sub>レ</sub>功德碑<sub>一</sub>」だ。

成語の「有口皆碑」(皆口を揃えて称揚する)は此の語彙・用例と通じるが，「碑」は「宗廟に立てていけにえをつなぐ石柱。〔礼記・祭義〕“麗<sub>レ</sub>于碑<sub>一</sub>”」「貴人の棺を墓につり下ろす綱をつけるための木，または，石の柱。〔礼記・檀弓下〕“公室視<sub>レ</sub>豊碑<sub>一</sub>”」「いしづみ。故人の事跡をたたえて，後世に伝えるための文章を彫りつけた石。また，その文。(略)“〔蔡邕・郭有道碑文〕於<sub>レ</sub>是樹<sub>レ</sub>碑表<sub>レ</sub>墓<sub>一</sub>”」の多義だ(『角川大字源』)。

意符・音符の「石・卑」から成る此の字は，元は「豎石」(豎てた石)の意(『説文解字』)だが，「卑」の矮小と逆に「豎」は「堅」と形が似て「樹」と同音だ。『表徴の帝国』の作者が突いた東京の中心の空虚に対して，共産党中国の首都には全国を支配する表徴の中核が厳然に存在する。其の聖域の天安門広場の中心に建てられた人民英雄記念碑と毛沢東記念堂は，前出の「今・心 念」と後述の『記念白求恩』・求心の話と通じる。

建国の前日に中国人民政治協商会議の閉幕式で，毛を主席とする中央人民政府の構成員が選出された。日本語では未熟の儘でいる「協商」が国家の意志決定機構の名称に入る事は，中国の商人的な現実主義の証とも取れるが，其の場で可決された3つの文書は，協商会議第1回総会宣言，解放軍への「致敬(表敬)電」，「為国犠牲的人民英雄記念碑」建立の決定及び碑文だ。功労者の顕彰が旨を成す後の2件は，「礼義之邦」の伝統に適う。

閉幕直前の夕刻，6百名余りの代表が天安門広場に集まり，記念碑定礎式が行なわれた。建国前夜の最終の通過儀式の此の山場<sup>84)</sup>は，中国人が好む「承前啓後，繼往開来」の流儀の手本だが，周の挨拶に出た「記念死者，鼓舞生者」は，後述の毛の『為人民服務』『記念白求恩』の動機でもある。毛が起草し式典で自ら読み上げた碑文は，「3年以来」「30年以来」「由此上遡到1千8百40年」の人民英雄を「永垂不朽」と讃える内容だ。

其の3段階の起点は其々，「人民解放戦争」の勃発，「新民主主義革命」の発端 - 5.4運動(1919)，中国近代史の幕開け - 阿片戦争である。3，30，109年の桁の遞増と共に，基数の10倍，36倍強の増幅も興味深い。毛・周が揮毫した表と裏の題辞・碑文は，永久不朽の祈願を込めて金の文字で詰め込んだのだが，変色せぬ予想期間の3百年<sup>85)</sup>は3の百倍に当り，竹内実が指摘した中国王朝の盛衰の周期<sup>86)</sup>と符合する。

建国初期の毛が耳を傾けた野党識者の「歴史興亡周期率」<sup>87)</sup>と絡めて，此からの系列論考の中で中共革命の性質，共産党中国の歴史的な位置付けと中国歴史の法則を探っていく予定だが，日影を測る標識から宗廟の傍の表徴に転じた碑は，歴史への責任感の例として後述する「廟算」

「王・民之大欲・大恐」：指導者の自意識・強迫観念と中国人の精神伝説の深層（序論・続）（夏）

と通じる。孫子の時代に遡る古代中国の宗廟で行なった出征前の作戦予測検討の儀式は、文・礼と武・兵の両道や仁・勇・智の3徳（才）の複合の上に立つ。

森首相は就任早々「神の国」発言で物議を醸したが、政権担当の党・派を問わず閣僚が年頭に伊勢神宮を参拝する規矩は、此の国及び為政者と神との絆を証す。西洋の絶対神と違う日本の神々の伝説の中空<sup>88)</sup>は、上記の中国の神話体系の特徴と接点があるが、首相を始めとする面々が大挙して三重県へ赴く光景は、君主の祭儀の場を都に置いた中国と比べるまでもなく、東京の中心の空虚と「孤島」の双焦点楕円形の二重構造<sup>89)</sup>を象徴する。

森首相は批判を和らげる為に或る会合で、今日は神の話はせず紙（原稿）の儘で話すと言った。前任者・小淵も駄洒落を好んだが、此の語呂合わせの戯言は人畜無害の軽口としては見過ごせぬ。尤も、平成日本の神とお上が紙並に薄く軽く成ったのは否めない。村山富市首相が橋本龍太郎副総理（自民党総裁）・武村正義蔵相（新党さきがけ代表）等と共に伊勢神宮を参拝した翌日（1996．1．5）に辞任した事が、好例に挙げられる。

彼は1週間前に行なった年頭会見で「責任の有る政治」を唱え、伊勢神宮での記者会見でも政局運営に意欲を示し、景気回復や不良債権の処理、クリントン大統領の訪日等の課題に全力で取り組む以外は言う事が無いと述べた。舌の根の乾かぬ内の変心は人柄や状況からすれば意図的な二枚舌とは思えないが、一夜にして正当な理由も無く政権を投げ出したのでは、何の為に伊勢神宮まで出向いたのかと儀式の虚しさを感じせずにはいられぬ。

連綿不断の不朽・濃密・「豊盛」志向と一代止揚の「速朽」・淡泊・「<sup>うすっぱら</sup>単薄」傾向

首相の伊勢神宮参拝は65年佐藤内閣以降の恒例行事だが、社会党は政教分離に反するとして批判して来た。同党から出た首相の村山は95年の初め風邪を理由に中止したが、4月の地方選を応援する際に立ち寄って個人の資格で済ませた。政治的な観念形態も勝てぬ社会的な習慣勢力の強さが思い知らされる半面、「野合」と誹られた連立政権の成立に因る中断、及び再開で露呈した拘束力の無さは、経済敗戦の時期を考えると意味深長だ。

96年1月4日、村山首相の在職日数は大平正芳と並ぶ554日に成った。555日目の辞意は弾珠遊戯の大当りの瞬間の自動定位めいて児戯っぽいのが、先輩の記録を抜く事が燃え尽きに繋がった結末は小淵首相と一緒にだ。邪気・弱気等の破り難き「心中賊」を指導者の大害として来たが、平成の数人の首相の転落は醜聞の邪悪や心身の軟弱の所為だ。村山首相の自棄は高齢の要因も有ろうが、転換点の恒例行事には自尽の美学が見て取れる。

伊勢神宮の20年毎の遷宮の「速朽」志向は、不朽を求める中国人には奇妙に映る。尤も、浪費が文化の発達を促す事も儘有るし、関連産業を潤し地域を振興する寄与も生産性を持つ。昨今の首相や閣僚の使い捨て化が目に見えるが、「滞貨（在庫）一掃」の組閣姿勢<sup>90)</sup>の様に、

「廟算」の字面や「碑」の字形と合う卑近な算盤が秘密の一端か。中国の政権担当者の長期固定化は其と逆で、権力への執着から禅譲や盪回しを排す結果でもある。

竹内実は戦後50周年の直後の短評の中で、中国で夥しい記念論文や回想録が連日に新聞を賑わした現象に触れ、中国料理の宴会でもう此で料理は終りかと思うと、又1皿1皿出て来るのに似ており、而も大抵の日本人が前菜で満腹しているという次第なのだ、と語った<sup>91)</sup>。食欲の旺盛や饗宴の「丰盛」(豊富。盛り沢山。豪華)から、中国的な「飽満」志向を前掲論考で説いたが、際限無く膨らんで行く此の系列論文自体も中国流の見本か。

日・中比較の参照座標として此处で和蘭<sup>オランダ</sup>を取り入れたいが、極東の老大陸国家、弧島経済大国と北欧の海に面する小王国の縁は面白い三角に見える。鎖国時代の日本は4百年前(1600)通航を始めた後、専ら和蘭を通じて西洋文化を輸入し蘭学まで生まれた。其の前に日本が手本とし続けた中国は19世紀末から逆に日本に倣い始めたが、戦後日本の経済成長と共に中国の近代化の「<sup>モデル</sup>样板」と成った外国には、同時代の和蘭も入っている。

曾て鄧は和蘭首相と会見する際に、相手国の「艱苦奮闘的精神」を讃えた。中華民族の「愚公移山」の伝統に因んで、其の「填海造地」を「愚公移海」と名付けた。1人当りの耕地が世界下位の中国よりも少ない和蘭は農産物の輸出大国に成り、我々は見習うべきだと語った<sup>92)</sup>。人工衛星から肉眼で見える地球上の3大人工建造物は、中国の長城、エジプトの金字塔と和蘭の埋め立て地と言うが、古代・現代文明の其の結晶も中・蘭の接点だ。

衣・食・住の専門家に由る日本人の精神風土の研究で、日本大学教授(建築)・宮川英二は建築の様式から発想の特質を突き詰めた。曰く、欧州の石造りや煉瓦造りの建築は、小さな石の小片を立体的に組み合わせて、立体感の漲る塊の様な全体構成がはっきりした意匠で、故に強烈な印象を受けるが、日本の建築空間は部屋の中の立面を平面的に厚紙に書いて起こして出来上がり、其に軽い天井を張って立体感が無く<sup>うす ぺら</sup>薄っぺらな平板な面だ<sup>93)</sup>。

彼は3次元的な思考が余り無く2次元的な思考が多く、持続的な物や蓄積する事を好まぬ日本的な心性を直観した。パースペクティブに点に成る様なコペンハーゲンのアパートの一棟の長さや、アムステルダムの或る区域の第1次大戦後に出来た鳶色の煉瓦造りの同じ形のアパートが東京の羽田~新橋に相当する間にずっと続いている光景を例に取り、淡泊な日本人は其の息の長さを冗漫に感じ、左様な思考には耐えられないと断言した<sup>94)</sup>。

全体構成を初めから考えて原理的に組み上げるのと違う平面思考から、日本人は場面、場面の繋ぎが大変に上手で、見栄を切る様な場面、場面の見所、節目を確り置き巧く繋いで行く、と言う<sup>95)</sup>彼は自民族の習性に正・負両面の評価をした。畳に埃が落ちぬ様に天井に<sup>うす ぺら</sup>薄っぺらな物を張る日本流に対して、天平時代の天井は中国の影響で張らずに屋根の軒裏の<sup>はり つか たるき</sup>梁、束、垂木の具合でガッチリとした立体構成を見せていた、との指摘<sup>96)</sup>も興味深い。

其は大平首相急死と鈴木内閣辞職・中曽根内閣成立の間の1981年の論断だが、石油危機で

「王・民之大欲・大恐」：指導者の自意識・強迫観念と中国人の精神伝説の深層（序論・続）（夏）

生活必需品の買い貯め騒動が起きた73年11月に、政治家の「近視症」を日本の大きな欠点とし、彼等の基本姿勢を考慮して期待し過ぎぬ方が好いとキッシンジャーに忠告した周も、其の基本姿勢を「薄っ篋」と形容した<sup>97</sup>。毛は米帝国主義に「紙老虎」（張り子の虎）の渾名を付けたが、今の「紙の国」の天井（権力の頂上）も似た様相の物か。

平成天皇の次子の成婚の際（1990）、民間人出身の妃を礼賛する報道機関の言辞に「純情・可憐」が踊り出した。天皇の倭・漢混合の文化的な二重性を抉出した<sup>98</sup>石川九楊は、日本人の天皇観の表裏にも触れた。天皇の赤子が逆に天皇を自分の赤子と見て保護の手を差し延べたく成るといふ其の心理<sup>99</sup>は、後述の「可憐」の日本人好みの語意に裏付けられた。妃の似顔の張り子が東北の農村で流行った事も、「紀子様ブーム」の示唆だ。

日本人は模範や羨望の的に肖る真似を好み、漢語の「不肖」（父に似ていない愚か者）を謙称に使う。「小・月」から成る「肖」は肉体の「象」（相似）<sup>100</sup>と共に「小人」<sup>こびと</sup>の含みも有るが、「肖る」の次の和製語意は「小人」（俗物）<sup>しょうじん</sup>の打算を感じさせる。「感化されて似る。物に感じてそれと同じようになる。特に、しあわせな人に似て自分も幸福を得る。狂言、財宝“こなたの御年にもまた御果報にも - ・りたう存じて”」（『広辞苑』）

文例の中の「果報」と例の「功德」に出た其との連環は、後で検証する中共軍の懸賞 健勝の絡繰と繋がる。「不肖・肖る」の謙称・顕彰から、「紙老虎」の造語者<sup>101</sup>に対する民衆の不逞な一面が見える。毛の彫塑が到る処に建てられた「文革」中、彼は斯く愚痴った。君等は大理石や花崗岩、不銹鋼でそんな物を造って置き、自分は家で寝ていて、儂を風や雨、日に曝させる儘、外の護衛に当らせている、余り残忍ではないか、と<sup>102</sup>。

人民英雄記念碑の建造にも使われた花崗岩は、頑丈な故に頑固さの代名詞と成る。「鋼鉄公司」を連想させる「不銹鋼」と共に、中国の表層の剛構造を改めて印象付けるが、強・豪の張力の下に陰・柔の弾力が隠れている。「肖る」の対象に含まれる「優れた人」（『角川大辞源』）は、「出類拔萃・天降大任」の文脈と通じるが、紀子様と別の「可憐」（可哀相）に対する毛の自嘲は、柔弱な小人の保護に利用される偉人の宿命を窺わせる。

柔弱な小人は他ならぬ「儒」の字形の意味<sup>103</sup>であり、漢字の寓意性は件の「住」にも現われる。「人・主」の複合は住居・居住の本質と吻合するが、人民と君主・指導者との関係と結び付けば別の発見が出る。竹内実とは毛+周の「皇帝型権力+宰相型権力」構造を論じた<sup>104</sup>が、晩年の毛の「家長」と周の「管家」（執事。番頭）、建前なる人民の「当家做主」（主として[国]家を切り盛りする事）は、言わば3焦点楕円国家を構成した。

天子の子の立場に甘んじた昔の中国の「子民」は、天・王の庇護を欲す依頼心理を隠し持った。「一盤散沙」の中国人が国や指導者の威信に敏感なのは、自分の安住の為に他ならない。日本の有権者が「紙天井」風の政権担当者に不安を抱かぬ様子が、中国の見地から過剰な楽天安か諦観に因る無防備に映るのは、為政者の大恐の種たり得る民衆の大欲の故だ。中・日、王・

民，古・今，恐・欲，表・裏……等の2元が，此处で多重に絡み合う。

多岐に渡る対象は複数組の複眼に由る重層的な透視を要するが，多元同時進行の叙述が無理である以上，中国の講談の切り口上の「話分両頭，単表一枝」(話は2つに分れて，先ず単に片方を語ろう)は，鷹の視線を持つ蟻の歩みの1形態に成る。再び上記の周の日本政治家評に焦点を戻すが，大きな乱世の中で度量の大きい人間が少しずつ出始めようと信じると言う彼の期待<sup>105)</sup>は，4半世紀後の逆の方向性と芳しくない有様に裏切られた。

perspectiveは「透視画法・遠近法。遠景。眺望。見込み。前途」の多義(『広辞苑』)で，前出の学者の感想ではともとも取れるが，「遠景規劃」(長期的な青写真)の欠如で前途が覚束ない日本の現状は，国家の設計師の遠近法にも問題が有る。西洋と東洋の透視画法の特質は中国流で其々「焦点透視」「散点透視」と言うが，同じ自在な遊動が長所を成す後者でも，散点の背後の焦点の有無で更に指向性が岐れる。

宮川修二は日本的な場面繋ぎの工夫の例に，屋根の形に微妙な変化を加える細工を挙げた<sup>106)</sup>。世界で無類な昨今の日本の不良債権処理の遅滞は，老朽な屋根の全面修繕はせず絆創膏を張る様に当座の雨漏りを手当てした結果だが，小手先の其の場凌ぎの弥縫策は上記の発想とも同根か。中国では局地の実情から極致の真理を求める实事求是の精神等，焦点(全体を支配し収斂させる基軸や理念)無き散点透視ならぬ焦点付き散点透視が多い。

宮川修二が指摘した日本人の淡泊と持続力の不足も，小綺麗に纏まり大きく拡がらぬ傾向の根底に有ろう。鄧が好きなサッカーを例に取れば，和蘭流の「全攻全守」が1970年代に旋風を起したが，攻・守の両方に全員が参加する斬新な戦法は，「海賊」の威名の通り強力な心・技・体が前提だ。同国首都の例の同形建築が延々に続く光景と正に一致するが，近来台頭しつつある日本チームには石や煉瓦造りの建築の長持ちの意志が欠ける。

### 「永志・長恨」の不易と流動；寛宥・寛裕の相関と友善・悠然の難易

今年の五輪で好進撃を見せた日本サッカーチームは，準々決勝で米国の泥臭い闘いに逆転負けした。フランス人監督は総括で世界との体力面の差を最大な課題にしたが，数年来の同チームが重要な国際戦で喫した苦杯には，最終局面で集中力が切れた<sup>バターン</sup>類型が目立つ。94年先進国首脳会議(ナポリ)の際に息抜きの一息で体調が崩れ，在職日数が戦後15位と成った途端に退場した村山首相も，緊張の糸が直ぐ切れる心身の脆弱を露呈した。

就任2週間後の其の急性胃腸炎・緊急入院は大舞台での不慣れも有ったが，政権担当の心の準備と体の負担能力の不足は，後の棟梁・統領の投了の伏線と成った。中国語の「結実」は「頑丈」「実を結ぶ」意を持つ<sup>107)</sup>が，村山政権の瓦解は両義の相関を裏付けた。長命政権の条件に大物の心・技・体が入る事は，小淵政権の夭折で再び立証された。大欲・大恐に対応する

「王・民之大欲・大恐」：指導者の自意識・強迫観念と中国人の精神伝説の深層（序論・続）（夏）

大物指導者の「大」は、正に一棟の建物も一点に過ぎぬ規模スケールに近い。

部屋数が9999.5に上る紫禁城のほも左様な壮観を呈すが、宮川修二が日本流の場面繋ぎの見本とした絵巻物や回遊式庭園<sup>108</sup>の平面性は、別の共同研究者が触れた山東・曲阜の孔子廟の同じ建物の繰り返し<sup>109</sup>、敷地が3千平米の人民英雄記念碑の台座に詰め込まれた、百年余りの闘争を描く巨大浮彫スパンの跨度や立体感と本質的に違う。百年単位の歴史の「長廊・長河」を一望する「巨幅画卷」は、中国的な歴史認識の土台に彫り込んである。

前菜で満腹する日本人の習性を指摘した竹内実は、国際間の問題にも日本人の甘えが出ると述べた。氏曰く、(中国人は日本の侵略戦争を)後何年ぐらい経てば忘れてくれるのでしょうかね、と聞かれる事も有るが、百年と答える事にしている；江総書記の(抗戦勝利50周年記念)演説にも、子々孫々語り伝えなければ成らないとの1句が有り、忘れる事は先ず不可能だ、と<sup>110</sup>。朱首相も直近の訪日の際、歴史を忘れる事は犯罪だと断じた。

百年で忘れ得る可能性は忘れ得ぬ不可能と撞着するが、前者は日本人の平均的な感覚や人間の平均寿命を超える間隔の故に限り無く後者に近い。禊ぎの終了が唱えられた戦後50年の節目と、木造家屋の立て替えの標準的な時期に由来した伊勢神宮の遷宮周期は、年数が共に2桁で足しても3桁に成らぬ。「後何年ぐらい」云々に至ると、1桁の想定さえ読み取れる。中国語の疑問詞は1桁の「幾」、零～無限大の「多少」と使い分けてある。

「多少」は日本語で少量・若干量を言い、中国語で大量・相当量を表わす。「幾多」と次元が違う後者の用例には、「古今多少事、都付笑談中」が思い浮かぶ。此で結ぶ『三国演義』の冒頭の詞は、「滾々長江東逝水、浪花淘尽英雄」で始まる。日本人は直ぐ水に流したがるが、中国でも其の名句の様な「淡化」が有る。但し、「淡」の字形が示唆する水と炎の冷却・相殺は、中国人の歴史清算の場合では長江の流れの如く緩慢で壮大な物だ。

百年経てば忘れる様に成ろうとは、大雑把ながら現実と理念の裏付けを持つ見方なのだ。現に、胡耀邦総書記は1985年、日本の閣僚に由る靖国神社公式参拝に就いて、中国人民の感情を傷付けぬよう配慮して欲しいと訴えて斯く語った。中国は8ヵ国聯軍の侵略を受けてから85年経ち、漸く其の記憶が薄れて来たが、抗日戦争の勃発からは未だ40年余りしか経っておらず、後40年ぐらい経たぬと淡々たる気持ちには成れない、と<sup>111</sup>。

彼の1年余り後の失脚の罪名には、党・国家の公式見解から逸れたとされる一部の不規則発言が有ったが、此の感想にも強い個性が出た。上記の語りの相手・山崎豊子は延安革命記念館で、戦車の破片に記された黒ずんだ「不忘民族恨」に震撼された<sup>112</sup>。歴史を永久に記憶して行こうと言う江総書記の呼び掛けは、本音と建前を兼ねた此の標語に沿う正統派・優等生の感じがするが、前任の前任に当たる胡の説も「胡説」(出鱈目)ではない。

「万寿無疆」「永遠健康」の祈願を捧げられた毛・林は、1万年の存命、健康の永続は有り得ぬと言った。百年も記憶は鮮明さを保ち難いと胡が考えたのなら、「文革」中にも健在だった

現実的な見積もりと思える。今年で満百年を迎えた1900年の8カ国聯軍侵略は、彼の予見の通り一層に記憶が稀薄と成った。1840～42年の阿片戦争や1894年の日清戦争も、百年経った後は集団的な記憶の全景の中で後退した傾向が見られる。

但し、此を歴史の風化として片付けるのは短絡的だ。件の英・米・独・仏・露・日・伊・奥8カ国の多くは、近景大・遠景小の遠近法に合う様に、関係改善に伴い良い<sup>イメージ</sup>形象が悪い形象を覆うに至った。阿片戦争と日清戦争の場合は、中共政權を逸早く承認し香港返還にも応じた英国の対処や、中・日の政治・軍事等の総合的な国力の力関係の再逆転が要因だ。過去への寛宥の前提には寛裕も入るが、「友善」より悠然の方が難しいかも知れぬ。

阿片戦争より抗日戦争に拘る中国を白人恐怖症と断じる向きは、一部の日本人の自身の西洋崇拜心理の屈折に過ぎない。人民英雄記念碑は碑文に阿片戦争勃発の年（1840）が明記され、高さの37.94mが抗日戦争・日清戦争の勃発の年（1937, 1894）と暗合する。此の事実が象徴される様に、中国を其々世界と亜細亜の最強国の地位から引き下した欧・亜の2島国は、近・現代の中国に於いて共に最大な憎悪を招いた外国だ。

毛は1973年キッシンジャーと会う際に、中国の外国人を排斥する傾向に進んで触れた。外国と余り幸福な体験をして来なかった事を相手が一因に挙げると、彼は頷いて次の様に言った。「確かに、此の数百年、主として8つの国が、其から義和団の乱の際には日本が。日本が中国を13年間支配し、中国の主要部分を抑えていました。過去には侵略的な外国勢力である列強が、中国を支配しただけでなく、賠償金まで求めて来た。」<sup>113)</sup>

外国から侵略された歴史の範囲を百年以上としつつ、1世紀余り前の阿片戦争を挙げず英国を名指しなかった処が興味深い。侵略と賠償金請求の前例を作った先発の英国が「罪魁禍首」だとすれば、領土の部分乃至大半を占領した後発の日本は、最も新しく且つ重い創傷を与えた故に「罪大悪極」の部類に入ろう。我が国と日本との場合は我が国と貴国との間に比べて関係修復が難しい、と毛がキッシンジャーに示した予見<sup>114)</sup>は無理も無い。

毛は上記の2点の言説の間に、日本に賠償金を求めなかった理由に触れた。あれは民衆にとって重荷と成ってしまう；賠償金額を全て算定するのは難しく、どんな会計士にも出来ぬ仕事だ；こうして初めて2つの国民が敵対関係から和解へ移行できる、と言う<sup>115)</sup>。後世の安寧の為に目先の犠牲に甘んじる深謀遠慮を系列論文<sup>シリーズ</sup>で指摘したが、後で詳述する毛のこんな温情と律儀は意外と、其の商人的な現実主義の算盤よりも大きい要因だろう。

其の「国際主義」の感情と共に、賠償金額は勘定できぬとの見方も彼だからこそ言えた真実だ。南京大虐殺の死者数の精査を求める声が日本で上がったが、干支の1回以上以上の時間の経過を考慮しなくても、所詮「糊塗帳」(ごちゃごちゃに成った帳面)であるに違いない。中国で処世の知恵とされて来た逆説には、清の風狂画家、江沢民の故郷・揚州に住んだ鄭板橋の「難得糊塗」(何も考えぬのは難しい。偶に阿呆<sup>たま</sup>に成るが好い)が有る。

「王・民之大欲・大恐」：指導者の自意識・強迫観念と中国人の精神伝説の深層（序論・続）（夏）

有益な曖昧と悪質な誤魔化しの両面を持つ糊塗は一概に肯定できぬが、歴史の負債や記憶の償還・消去は時間が必要だ。上記の鄧の和蘭礼賛は日中戦争勃発の恰度50年後の1987年の事だが、世界大戦で日本に損害を与えられた事も中・蘭の共通点だ。修好4百周年の今年の天皇の訪蘭が契機で日・蘭首相は過去に区切りを付ける事を確信したが、謝罪を巡る日・中の「僵局」（手詰まり状態）は、双方の感覚のずれに帰せる処が多い。

98年、訪日の江沢民は歴史認識に固執し反感を買ったが、其の直前に日本の謝罪を今後求めぬよう宣言した韓国大統領との落差が大きい。日本の映画や演歌を禁じ続けた国民感情が一変して、訪日の金大中は友好を演出した。「恨、5百年」の歌を好みながら簡単に終結した韓国流は、執念深い中国人から見れば情緒的だ。魯迅も日本の友人に「度尽劫波兄弟在，相逢一笑泯恩讐」と詩を贈ったが、中国の指導者なら直ぐ長幼の順位に拘る。

尤も、中共は長年ソ共にも不服を抱きながら、弟（中）が兄（ソ）を追い超すよう願うと言う宴席でのスターリンの祝辞に対して、建国直前に訪ソした劉少奇は恐縮・固辞の意を表わした<sup>116</sup>。佐野真一の『旅する巨人』の主人公の1人 - 渋沢敬三は、日銀副総裁を務めた敗戦直後に、円を米国で印刷せよと言う占領当局の意向を一蹴した<sup>117</sup>。共産党中国は民族尊厳心に於いて負けぬはずだが、当初の紙幣はソ連に製作を委託したのだ<sup>118</sup>。

但し、劉少奇の揉み手も金大中の「以德報怨」も、渋沢敬三の祖父・渋沢栄一が言う『論語』・算盤の両面が有ろう。劉一行はスターリンの破格の厚意で原爆実験の記録映画を見せて貰い、金は歴史の怨念を超えた南北朝鮮の対話に因りノーベル平和賞を授けられ、其の前日（今年10月12日）首相として初じめ訪日した朱鎔基の礼賛も受けたが、共に低姿勢に見える「高姿態」（高邁・悠然・寛容な姿勢）の功德の果報の好例と思える。

日本と韓国・和蘭の怨念の氷解は、同じ孤島や皇室の有る国同士で情が通じ易い事も要因か。左様な地理や制度の接点が無い共産党中国に対して、韓・蘭並みの反応を期待するのは無理だ。さて置き、此の4極を並べて観れば日本の特異性が浮かび上がる。此の国の平均的な感覚は「恨、5百年」を異質な発想と見做し、和蘭王国の憲法上の首都の例の同形同色の建築の長距離連綿に馴染まず、「百年」の口癖を好む中国人と波長が合わない。

日・中の「公道」「公憤」の差異；司・死を兼ねる「宰」と「衆怒難犯」の拮抗

訪日の金大中大統領が歴史の怨念に区切りを付けたのは、豊臣秀吉が起こした朝鮮への侵略戦争（1592～98）の終結4百周年の事だ。彼が国会演説で秀吉の名に触れず其の7年に言及した<sup>119</sup>のは、「恨、4百年」の証に思える。翻って、日中国交正常化の399年前（1571）の織田信長に由る比叡山焼き討ちや、赤穂浪士の復讐（1702）が被害者側に遺した恨みも、新千年紀の直前に和解の動きが出るまで3～4百年続いた。

国内の此等の積年の大怨に就いては、何年経てば忘れてくれるかと聞く人も居らず、冷戦終結と連動した直近の被害者の後裔や団体の寛恕も反響を呼ばなかった。一方で半世紀前の罪過を中国に忘れさせようとするのは、外国の侵略に因る被害体験を持たぬ国際社会の中の世間知らずの我儘か。毎年、師走に美談として茶の間を賑わす忠臣蔵の物語は、「私・義」に由る復讐と断じられた<sup>120)</sup>が、此处でも私仇に敏感な日本人の気質を感じる。

蒋介石は抗日戦争勝利後に儒教と基督教の精神を以て、敵国への「不念旧惡・与人為善」と呼び掛けたが、丸3世紀前(1645)の「揚州10日」の惨劇の衝撃度は、其の時点では大分薄れていと観て好い。揚州陥落後の清軍の「屠城」は、日本軍の南京大虐殺を語る際に下敷きとして引き合いに出されたりするが、中国人の脳裏に刷り込まれた受難の記憶の「淡化」は、次々に降り掛かる災難で歴史が塗り替えられて行く事も一因だ。

辛亥革命の「驅逐韃虜、恢復中華」(満族追放、中華復権)の合い言葉の様に、「不忘民族恨」の対象は全ての異民族侵略者を含む物だ。ところが、清軍の投降勧誘を断り揚州防衛戦を指揮し、陥落後は自尽未遂の末に処刑された明軍将領・史可法は、民族英雄の名声を歴史に残し民衆が揚州城外の梅花嶺に其の衣冠塚を建てた。反面、大虐殺をした清軍の指揮官の名が特記される事も無く<sup>121)</sup>、満族が地元で差別を受ける事も特に聞かない。

杭州・西湖の畔に宋の抗民族英雄・岳飛の彫塑と、彼を陥れ処刑した宰相・秦檜の跪像が建ててある。後者の子孫は差別を回避すべく姓を変えたと言われ、其の姓を持つ人が全氏族の名誉を守る為に最近訴訟を起した。秦檜の死去から845年も経ったが、彼の悪名は「遺臭万年」の熟語の通り、更に10倍の時間が掛かっても消えまい。但し、其の大罪を許さぬ執念の持ち主は被害者の後裔よりも、国辱で傷付いた代々の中国民衆なのだ。

岳飛への称揚と秦檜への唾棄は中国人の精神伝説の典型と成ったが、『辞海』の「秦檜」の断罪では忠臣の殺害よりも「主張投降」の方が重い。結びの「主持和議、向金称臣納幣、為人所切齒」は、孟子が言った「国人皆曰可殺」<sup>122)</sup>を連想させる。「激起公憤」とは正にこんな事であるが、「公憤」の出典 - 『宋史・陳亮伝』の「二聖北狩之痛、為国家之大恥、而天下之公憤也」は、他ならぬ北宋の徽宗・欽宗が金の俘虜と成った故事だ。

敗戦を「終戦」と言う日本流は批判を招いたが、撤退を「転進」と誤魔化す表現は日中戦争の双方とも使い、「臭い物に蓋をする」は中国語で「捂蓋子」の対応が付く。帝が連行された事を狩猟に行ったとする「北狩」も、恥辱隠しの言辞の一例に数える。蔣の軍事政変に因る国・共決裂の丸8百年前(1127)、戦争賠償の不足分を補う形で皇室等3千余人が金へ移送された。北宋の幕切れと成った「靖康之禍」は、其ほど惨めな出来事だ。

79歳の毛が目の手術の時に歌で聴いた岳飛の詞の中の「靖康恥、猶未雪；臣子恨、何時滅？」は、両帝を奪還できぬ遺恨の吐露に他ならない。徽宗も欽宗も結局50代半ばで非業の客死を遂げ、後者は秦檜死去の翌年(1156)金が宋へ出征する際の閱兵式で、金の帝の指図で矢的

「王・民之大欲・大恐」：指導者の自意識・強迫観念と中国人の精神伝説の深層（序論・続）（夏）

とされ射殺後は馬の群れに踏み躪られた。非人道的な環境の中で先立った両皇后も、占領軍に酒席で歌を強要され身体検査の名目で性的な侮辱を受けた<sup>123</sup>。

文学者も含む日本人は今回の敗戦までは、滅亡の遙かな後方の安全圏から滅亡を想像し表現したのだ、という武田泰淳の痛烈な喝破<sup>124</sup>は、『司馬遷 - 史記の世界』（1943）の著者らしい「<sup>グローバル</sup>全球眼光」を感じさせる。日本人は内戦では非情な処遇を経験して来たが、北宋の最後の2帝・後の様な末路とは無縁だ。占領軍司令官と並ぶ昭和天皇の写真が高低、優劣の印象付けて衝撃を起こしたが、亡国の君主の安全が保障された上の話だ。

日本の戦後文学に盛り込まれた民族の初体験には、大岡昇平の『俘虜記』（1948）等が記した海外での集団俘虜生活が有る。中国では越王の「臥薪嘗胆」も蘇武・文天祥の「忠貞気節」も、俘虜体験から生まれた伝説だ。『辞海』の「秦檜」の経歴の汚点には、金の俘虜と成った後の釈放を脱走と詐称した1件も入る<sup>125</sup>。毛沢東の最初の夫人と弟は国民党に捕まえられ処刑され、長男が戦死した朝鮮戦争でも中国軍に大量の俘虜が出た。

俘虜に成るより死を選ぶ志向は中国でも昔から有るが、「豚に成っても生き抜け」<sup>126</sup>の発想を持たぬ日本人は、其の潔癖を愚直に貫いた事も有って敗戦までは此の点で処女性が保てた。対して直近の米国では<sup>ベトナム</sup>越南戦争の俘虜経験者が国防相と成ったが、前回の世界大戦に於ける日本の主要交戦国は滅亡に慣れたわけだ。ソ連の場合と違い其の中・米から俘虜が余り虐待されなかった事は、結果的に戦後日本の平和惚けを助長したかも知れぬ。

大変な敗北の後で勝者から保護の手が差し伸べられた故、「純情・可憐」の心性が大きな変化も無く温存されて来た様だ。マッカーサーが命じた<sup>フィリピン</sup>比 戦場の宿敵・山下奉文の処刑を、「公報私仇」（公の大義名分で私仇を討つ）の様にする向きが日本に有るが、国際社会の「公」の座標系では日本の狭隘さが目立つ。「公憤」の語義も『辞海』と『広辞苑』では其々、「公衆の憤怒」と「正義感から発する、公けの事柄に関するいきどおり」だ。

同じ概念の主体は片方は公衆で片方は個人も有り得るが、中国人の「一盤散沙」と日本人の「抱団（集団で固まる）意識」の定説との乖離は興味深い。公衆の憤怒を表わす「民憤」も、日本語には入っていない。昭和末期の連続少女誘拐猟奇殺人の容疑者・宮崎勤が逮捕された時、法相は死刑に処すべきだと語った。中国流の「不殺不足以平民憤」（殺さないと民憤を鎮めるに足らぬ）と通じる論理だけに、「民憤」の言い方が無い事は妙だ。

其の頃の数人の法相は仏教の信条等を理由に死刑執行の許可を拒み、3年と4ヵ月も死刑執行無しという事態を招いた。殺生を忌み嫌うのに任命は辞退せず、個人の宗教的な心情の優先に因る公務の過怠<sup>127</sup>にお咎めが無いとは、「神（紙）の国」の実態を映し出す事象だ。阪神大震災の際にも私権や私道が救援の壁に成ったが、「公道」の第一義（世の中一般に通ずる道理。公正な道。『広辞苑』）が日本で形骸化した事と考え合わせたい。

『角川大宇源』の「公道」の解は、「人の守るべき正しい道。公正で天下全体に通用する

道義。〔荀子・疆国〕“道<sub>下</sub>夫公道通義之可<sub>上</sub>以相兼容者<sub>上</sub>” 誰もが通る公共の道路。〔韓非子・内儲説上〕“棄<sub>下</sub>灰於公道<sub>下</sub>者，断<sub>下</sub>其手<sub>下</sub>” 《俗》公平な」と言う。『辞海』の同項では同じ漢籍が出典のは無く、代りに上記の語義に就いて、「公平。如：價錢公道。杜牧『送隱者一絶』詩：“公道世間唯白髮，貴人頭上不曾饒。”と詳解する。

適正な価格を言う「價錢公道」は、同辞書の用例の「主持公道」（公道を強く主張する事）と共に、今の中国に於ける「公道」の最も常用の成句だが、『論語』と算盤の二極は此処にも現われる。「主持」は上記の「秦檜」にも出た（「主持和議」=和議を仕切る）が、中国語で「主宰」「主張」の両義を持つ此の語は、『広辞苑』に一応入った（=ある物事を維持するうえで、主要な役目をする事）ものの、日本では馴染みが薄い。

「文革」後期に復活した鄧の「主持中央工作（=仕事）」の様に、中国では「主持」は使用頻度が高い。中国語の「主持」は「司会（する）」の意も有り、会議や番組の司会者は「主持者（人）」と言う。森首相に対する世論の批判の種には、場持ちが上手いから外交の場でも軽口で盛り上げれば好いと言う感覚や、首相として前代未聞に芸能プロダクションの行事に顔を出す挙動があったが、其の主持にも場面繋ぎ的な回遊の嫌いが有るか。

主宰・宰相の「宰」は「司る。切り盛りする」意だが、「宰」は屠殺の含みも有り「<sup>ス</sup>司」は「<sup>ス</sup>死」と同音だ。「宰」の由来と原義には罪人の事も絡む<sup>128)</sup>が、在任中に「主持日常工作」の事務方の要求にも拘らず死刑確定の承認を断った法相は、「公道」の類義語 - 「公理」の出典<sup>129)</sup>の通り、「専用私情，憎愛不由公理」と言うべきか。1993年3月に死刑執行を再開した後藤田正晴法相が批判した様に、其の儘では法秩序は保てない。

後藤田の「情と理」<sup>130)</sup>と評論家・塩田丸男の「筋を通すか，情に生きるか」<sup>131)</sup>は、日本人と中国人の共通の「両難」を概括する鍵言葉に成る。例の裁判前の「極刑」発言は法の番人の掟を破ったが、秦始皇の「一人之心，千万人之心也」<sup>132)</sup>の恣意と逆に、其の公人の憤りは万人の世論を慮る公的な性質も有る。「長い物に捲かれろ」に当る中国語は「隨大流」（大勢の流れに従う）と言うが、法規や体制も好く超法規の大勢に敵わぬ。

山本七平の『「空気」の研究』<sup>133)</sup>の一部の見方は中国でも通用し、日本人の「赤信号も皆渡れば恐くない」心理と似て、中国人は「法不責衆」（法は衆人の罪過を責めぬ）という法外の法を持つ。集団の逸脱に対する法の無力は例の法相の不規則発言の大衆迎合と共に、「衆怒難犯」（群衆の怒りには逆らい難い）の論理が根底を成す。『左伝・襄公10年』の「衆怒難<sub>レ</sub>犯，専欲難<sub>レ</sub>成」は、正に王・民の大欲・大恐の本筋と直接に繋がる。

（未完）

2000. 11. 20（米大統領選が小数点以下の僅差で混迷が続き、同じく政治の空白に陥った日本で、自民党加藤紘一・山崎拓派が倒閣決戦の直前に食言し撤退した日）

「王・民之大欲・大恐」：指導者の自意識・強迫観念と中国人の精神伝説の深層（序論・続）（夏）

## 註

- 60) 61) 渋沢栄一『論語講義（2）』、岩波文庫、1977年、75、76～77頁。
- 62) NHK特別取材班『周恩来の決断 日中国交正常化はこうして実現した』、日本放送出版協会、1993年、50頁。
- 63) 96) 1973年11月14日、キッシンジャーと会談する際の周恩来の言葉。ウィリアム・パー編、鈴木主税・浅岡政子訳『キッシンジャー「最高機密」会話録』、毎日新聞社、1999年（原典同）、250頁。
- 64) 大下英治『小説総裁選 中曽根が笑った日』、角川文庫、1988年、386頁。
- 65) 権延赤『領袖涙』、中共中央党校出版社、1990年、119頁。
- 66) 68) 69) 何虎生主編『蒋介石宋美齡在台湾的日子』上、華文出版社、1999年、185、186、同頁。  
第一次資料が不明のこの説を敢えて取り上げたのは、精神伝説に着眼し其の真相よりも深層を重視する理念に基づく。本論考の根幹に関わる大問題なので、此からの系列論文の中で改めて詳述したい。
- 67) 二月河『乾隆皇帝』第6巻『秋声紫苑』、河南文芸出版社、1999年、374、405頁。
- 70) 李志綏著、新庄哲夫訳『毛沢東の私生活』上、文芸春秋、1994年（原典〔英語版〕同）、143～144頁。
- 71) 林克・徐涛・呉旭君（毛沢東の元秘書・主治医・看護婦長）著、村田忠禱訳『毛沢東の私生活』の真相』、蒼々社、1997年（原典＝『歴史的眞実 - 毛沢東身边工作人員の証言』、香港利文出版社、1996年）には、李志綏が記した毛の生殖能力の喪失や性病感染、長寿薬への執心等に対する、毛の病歴録や言論を駆使した反論が有る（159～164頁）が、強精剤の使用を否定する論証は見当たらない。但し、著者たちの立場からしては、同じデマと見做されるに違いない。
- 72) 井波律子は『酒池肉林』（講談社現代新書、1993年）の中で、「この新皇帝は媚薬を飲みすぎ、1ヵ月たらずで頓死してしまう」と述べた（142頁）が、直接的引き金は体内で昂進した陽・躁の排泄の為の下剤、及び其の服用に因る衰弱を回復させる為の「仙丹」を服んだ事だ。『辞海』『紅丸案』の解説は、「泰昌元年（1620年）、光宗即位後沈溺酒色、不久病重。司礼監秉筆兼掌御薬房太監崔文昇下瀉薬、病益劇。鴻臚寺丞李可灼進紅丸、自称仙方、光宗服後即死去」と言う。論文の中の「虎狼之薬」は正に催淫剤と峻下剤の両方を言う熟語だが、前出の「三十如狼、四十如虎」の情欲や「紅丸案」を含む晩明「3大案（事件）」と絡めて、此の事件を後に又取り上げたい。
- 73) 末永勝介『近代日本性豪伝 伊藤博文から梶山季之まで』、番町書店、1969年、203頁。佐野眞一『旅する巨人 宮本常一と渋沢敬一』では、「明眸皓齒に関する事を除いては、俯仰天地に恥じない」と成る（文芸春秋、1996年、75頁）。
- 74) 1986年3月3日新華社通信で公表された党中央規律検査委員会の処分決定には、関係者の阻止に拘らず靖国神社を参拝した事が理由に挙げられたが、所謂破廉恥な行為の中身は明かされていない。本人が自由意志か強制の為に沈黙を守り続ける事から、様々な憶測が出て来た。同年3月4日の『朝日新聞』の報道では、2月7日の同紙報道が中国側の匿名情報として伝えた買春容疑の噂が消え、ポルノショップに通った事が取り上げられた。当時の中国の巷で囁かれた媚薬購入の話と通じるが、真偽が定かでない風説を敢えて論考対象に入れたのは、註66で述べた方針に拠る。周而復の『白求恩断片』と毛の『記念白求恩』の接点と絡めて、後の「人言可畏」の文脈の中で此的一幕に再び触れたい。
- 75) 井波律子の著書（作品社、1998年）名。

- 76) 78) 武田泰淳・竹内実『毛沢東 その詩と人生』, 文芸春秋新社, 1965年, 195 ~ 196, 196頁。
- 77) 79) 80) 82) 中共中央文献研究室編『毛沢東詩詞集』, 中央文献出版社, 1996年, 63, 同, 62, 63頁。
- 81) 「而今我謂崑崙, 不要這高, 不要這多雪。安得倚天抽宝劍, 把汝裁為三截。一截遺歐, 一截贈美, 一截還東國。」(今 我 崑崙に謂わん, この高さは 要らず, この多き雪も 要らず。安んぞ 天に倚り宝劍を抽くを得て, 汝を 三截に裁ちきらんかな。一截を 欧に遺し, 一截を 美に贈り, 一截を 東なる国に還さん。竹内実訳, 前掲文献76, 196頁)
- 83) 王玉徳他『中華神秘文化』, 湖南出版社, 1993年, 313 ~ 314頁。
- 84) 85) 原非・張慶編著『毛沢東入主中南海前後』, 中国文史出版社, 1996年, 256 ~ 257, 258頁。
- 86) 竹内実『中国 歴史の旅』, 朝日選書, 1998年, 16頁。
- 87) 黄炎培(中華同盟会の構成員, 中国民主建国会主任委員, 共産党中国の初内閣の副総理兼輕工業相), 王季范(毛の従兄と学生時代の「保護人」[後見人], 毛の晩年の連絡役・王海容[前出]の祖父)等の識者は, 建国前から毛に中国の「歴代興亡周期率」に留意するよう進言し, 毛は民主を以て其を打破すると決意を表明した。(尹高朝編著『毛沢東の老師們』, 甘肅人民出版社, 1996年, 522, 467頁)
- 88) 河合隼雄『「古事記」神話における中空構造』(岩波書店『文学』1980年4月号), 『中空構造 日本の深層』(中央公論社, 1983年)所収, 27 ~ 44頁。
- 89) 日本を表わす「弧島」(弧なりの列島)は, 石川九楊(書家・評論家)の表現。『二重言語国家・日本』, 日本放送出版協会, 1999年, 6, 114頁。
- 90) 昨今, 組閣の度に新聞等に出る熟語。「繋ぎ内閣」と見られる直近の第2次森内閣が発足した翌日(2000年5月7日)の『読売新聞』の論評・『目指すものが見えない』(政治部・吉田清久)にも, 「与党と自民党派閥が提出した入閣希望リストをそのまま受け入れた順送り人事の感も拭えない。「滞貨一掃内閣」「5ヵ月内閣」など, 野党のみならず, 自民党内でも公然と囁かれている評価もあながち的外れではない」と有った。小堺昭三の『自民党総裁選』(角川文庫, 1986年)の中の第1次佐藤栄作内閣の組閣の裏話に出た「伴食大臣」「残パン内閣」(6, 18頁)と合わせて, 又折に触れて論じたい。
- 91) 111) 竹内実『切りふだはあるか』(『中国情報』1995年11月号), 『中国 国情と世相』, 研文出版, 1999年, 151, 151 ~ 152頁。
- 92) 1987年5月12日の談話。『鄧小平文選』第3巻, 人民出版社, 1993年, 232頁。
- 93) 94) 95) 96) 106) 108) 久野昭・宮川英二・田中日佐夫・平野雅章『日本人の精神風土』, 名著刊行会, 1981年, 287, 292 ~ 293, 293, 295, 293, 同頁。
- 98) 99) 前掲文献89, 139, 140頁。
- 100) 『角川大辞源』の「肖」の「解字」=「形声。意符の肉(からだ)と, 音符の小せう(にる意=似シノジ。また, かたどる意=象シヤツ)とから成る。体つきが似ている意。ひいて, “にる”“かたどる”意に用いる。」(1444頁)
- 101) 毛は1973年2月17日の会見で, 「主席は今英語を学ばれているのですか」と言うキッシンジャーの質問に対して, 「外部の人間の噂ですよ。気にも留めません。誤りです。英語の文字なら幾つか知っています。文法は知りません」と答えた。通訳・唐聞生が「主席は英語の単語を1つ発案されました」と口を挟むと, 「そう, “ペーパー・タイガー(張り子の虎)”という英語の表現を造りました」と頷けた。(前掲文献64, 130頁)なお, 前掲文献71の日本語訳者は唐の役職を「外交部

「王・民之大欲・大恐」：指導者の自意識・強迫観念と中国人の精神伝説の深層（序論・続）（夏）

アメリカ大陸局副局長〔美大司副司長〕と訳した（140頁）が、付記された中国語の「美大」は北米・大洋州の略語だ。

102) 曉峰・明軍主編『毛沢東之謎』, 中国人民大学出版社, 1992年, 320頁。

103) 『角川大辞源』の「儒」の「解字」=「形声。意符の人(ひと)と、音符の需<sub>ニユ</sub>(やわらかい)意=柔<sub>ニユ</sub>。または、こびとの意=侏<sub>ニユ</sub>)とから成る。もと、柔弱な小人の意。」(144頁)

104) 竹内実『朱鎔基首相の顔』(『中日新聞』1998年4月24日), 前掲文献91, 110頁。

107) 『辞海』の「結実」の語義は、「植物生長果実。牢固。亦謂健壯。」(用例略)但し、「結」(jie)の声調は と は其々第2, 4声だ。

109) 平野雅章(食物史家)の言。前掲文献93, 305頁。

111) 112) 山崎豊子『靖国批判』の中の北京』(『文芸春秋』1986年4月号), 『「大地の子」と私』(文春文庫, 1999年)所収(107, 109頁)

113) 114) 115) 前掲文献63, 128頁。会見の期日は同註101。

116) 師哲・李海文著, 劉俊南・横澤泰夫訳『毛沢東側近回想録』, 新潮社, 1995年(原典=『在歴史巨人身辺 師哲回想録』, 中央文献出版社, 1991年), 253~254頁。

117) 佐野真一『旅する巨人 宮本常一と渋沢敬一』(前掲文献73), 206頁。

118) 共産党中国は紙幣の自国での製作の必要性を認識しながら、自前の偽造防止の透かし入り用紙が無い為ソ連に製作を委託した。建国10周年の1959年、不仲と成ったソ連から用紙供給を拒否された後、開発を重ねて62年に漸く自力で出来た。(富田昌宏『お金が語る現代中国の歴史』, 三省堂, 1997年, 66~68頁)因みに、日中戦争の中で日本の贖札作戦の標的と成った中国の10元法幣も、技術が無い為に英国に印刷を依頼した物だ。(取違孝昭『騙す人 ダマされる人』, 新潮文庫, 1998年, 267頁)

119) 大統領訪日特別の随員で知恵袋の崔相龍(高麗大学政治学科教授)が明かした舞台裏の話に拠ると、金大中は国会演説を最も重視し自ら推敲を重ねた。「日本国民へのメッセージとして、日本人の国民感情を傷付けないよう、ギリギリの努力をした。“4百年前に日本が韓国を侵略した7年間”という個所が有るが、“豊臣秀吉”という名前は敢えて出さなかった。韓国人にとっては侵略者でも、日本人にとっては英雄だから。」(『朝日新聞』1998年10月10日)

120) 赤穂浪士たちへの処分を巡って幕府の内部で意見の対立が有り、大学頭林信篤や室鳩巢等が彼等を「義士」と呼び助命を願ったのに対して、萩生徂徠や太宰春台等は、内匠頭は法に拠って罰せられたので上野介への復讐は筋が通らず、「義であるが私」だとした。(宇野俊一他編『日本全史』, 講談社, 1991年, 623頁)

121) 『辞海』の「揚州十日」には侵攻部隊の将領の名前は出ないが、「南京大屠殺」には其の戦後の処刑まで明記された。両方の全文は次の通りである。「順治二年(1845年)清軍南下, 明史可法督軍師揚州, 率全城軍民堅守孤城。陰曆四月二十五日城破後, 清兵大肆屠殺十天。史称“揚州十日”。見王秀楚『揚州十日記』。」「抗日戦争時期日本侵略軍屠殺中国人民的暴行之一。1937年12月13日日軍侵占南京後, 華中派遣軍司令松井石根和第六師団長谷寿夫等, 对中国人民進行了長達六週的血腥大屠殺。集体槍殺和活埋的有十九万人, 零散被殺僅収埋的屍体就有十五多万具。全市三分之一的房屋被焚毀。抗戰勝利後, 松井石根被遠東軍事法廷処絞刑, 谷寿夫被引渡給中国政府処死。」

122) 『孟子・梁惠王下』。

123) 向斯・王霜『帝王后宮紀実』, 國際文化出版公司, 1993年, 368~269頁。

124) 武田泰淳『滅亡について』(1948年, 『花』第8号), 『新編 人間・文学・歴史』, 築摩書房,

1961年, 9頁。

125) 「靖康二年(1127年)被俘到北方, 成為金太宗弟撻懶的親信。建炎四年(130年)隨金軍至楚州(今江蘇淮安), 被撻懶遣歸, 詐稱殺死防守兵士, 奪船逃回。」

126) 映画・『芙蓉鎮』(謝晉監督, 1987年)の名台詞。

127) 後出文献130(下)267頁にも出た通り, 法相は死刑判決が確定後の6ヵ月以内に執行の命令に署名せねば成らぬ, と現行の法律で定められている。

128) 『角川大辞源』の「宰」には, 「罪人で, 家の中で仕事をする者。〔説文解字〕と有り, 同項の「解字」は, 「会意。意符の宀(いえ)と, 意符の辛(考<sup>ツ</sup>が正しい形。つみの意)とから成る。“サイ”の音は, つみの意(=罪<sup>サイ</sup>)と関係がある。罪人で家にあつて仕事をする者の意。古代, 罪人を雑役に使つたことからきてゐる。一説に, 形声で, 音符は, 辛<sup>ツ</sup> <sup>サイ</sup>(つかさどる意=司)で, もと, 宮中の饗宴をつかさどる者, ひいて, 官吏の長の意という。」

129) 『辞海』の「公理」の語釈は「猶言公道」。文中の出典は『三国志・呉志・張温伝』。

130) 後藤田正晴『情と理』(上・下), 講談社, 1998年。死刑執行の命令への署名を拒否した前任者たちへの批判は, 下巻266~270頁に出る。

131) 塩田丸男『ズジを通すか, 情に生きるか 当世サラリーマン行動学』, PHP文庫, 1985年(初出=『不安時代の生きがい』, 日本工業新聞社, 1976年)。

132) 杜牧『阿房宮賦』の名句。

133) 文芸春秋, 1977年。

## “王、民之大欲、大恐”：領導人自我意識、強制觀念 及中国人精神伝説之深層(序論・続)

幾年來, 中、日領導人及民衆在關於本世紀上葉的日本侵華戰爭的歷史認識上分歧日趨明顯, 其感情隔閡有影響雙方關係之虞。作者力圖從思惟、行動樣式方面的文化溝, 如中國式的追求不朽和日本式的容認速朽等差異中尋求根源, 探討相互理解、淡化並超越前嫌的可能性。

繼上篇提示的官民的終極性欲求和恐懼, 本篇圍繞大欲、大恐之“大”比較兩國及其領導人、國民的時空、觀念的規模和跨度。周恩來認為部分政治家的近視症是日本之重大缺陷, 本文欲從生理、心理、社會等層次剖析其單薄、淡泊之現象及本質, 並與中國的“大快樂主義”、“物量主義”(井波律子語)、百年意識、全球眼光做比較。

本篇對領導人之自我意識及強迫觀念影響重大的群眾心理, 包括喜怒好惡、欲望執着加以分析。導入“《論語》加算盤”(洪沢栄一語)的二元關鍵概念——“功德”, 作為後篇的“功德無量”、“功德林”、“功德碑”、“衆口皆碑”、“衆口鑠金”等視點的伏筆。

(Xia Gang, 本學部助教授)